

石城志

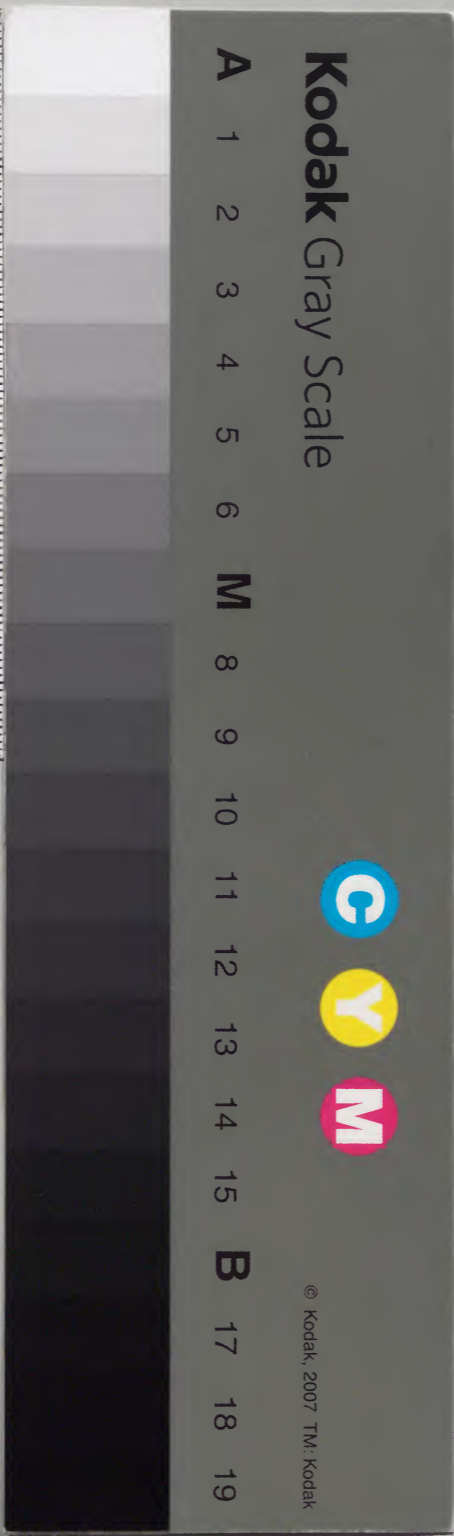
九

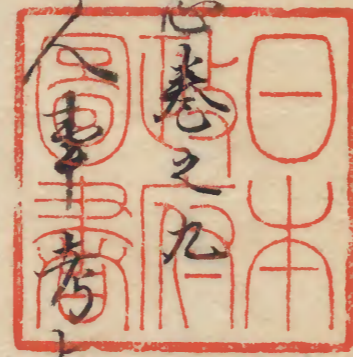
				和書門
		二九三七		
	一	二	一	
	四	二	一	
一	冊	架	函	號
二	冊			類

庫	文	閣	内	
七		三		和
冊		九		書
一		三		
八		七		
架		一		
		冊		
		號		
		類		

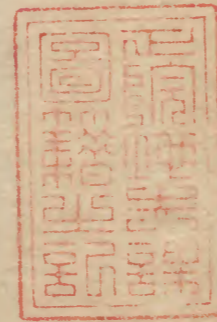
内閣文庫	
番號	和 29371
冊數	12 ( 9 )
函號	176 63

内二六四六號





丙 一 一 〇 四 五 號



鴻井

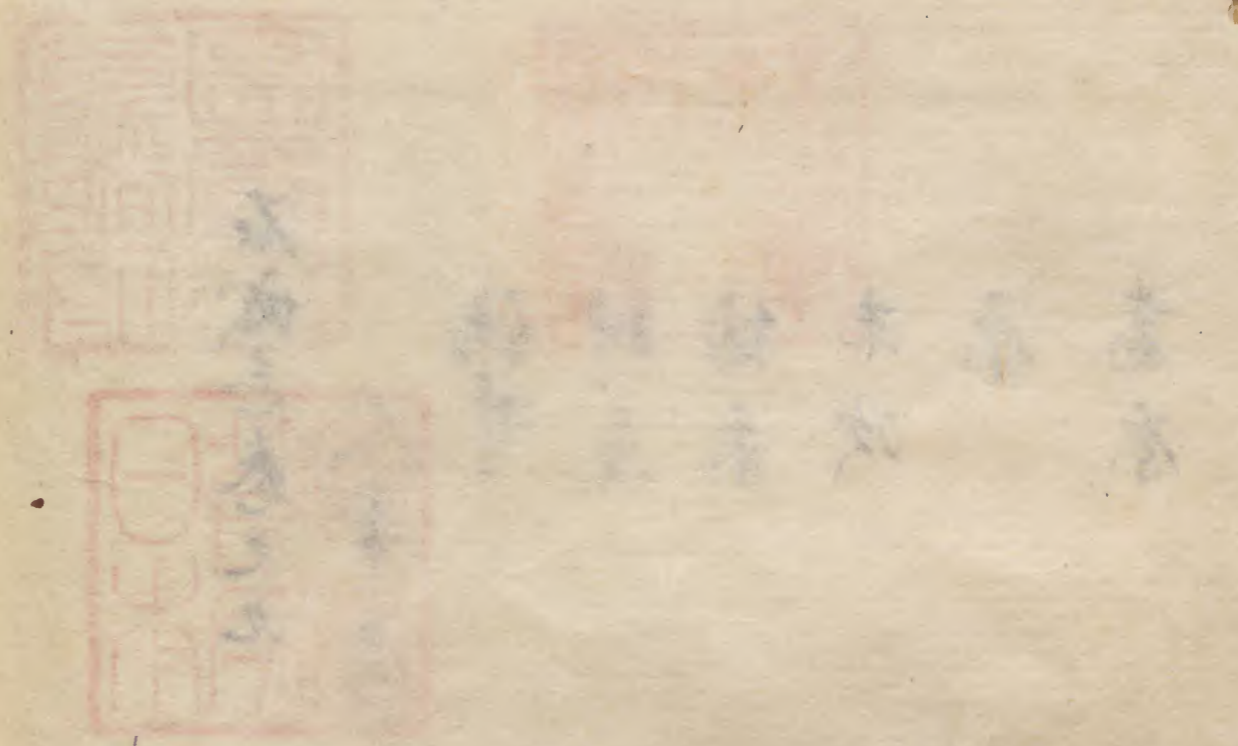
神屋

徳永

末次

原

高原

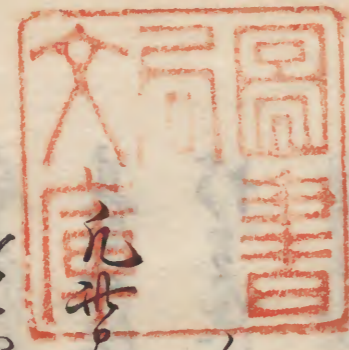


石城志卷之九

津田元彪校定

男 元貫編録

人事上



石城志を以て其の法家の事蹟に就き而して其の  
とありし所を以て其の跡を以て其の絶つてしまふ古志の  
傳はるる所を以て其の跡を以て其の絶つてしまふ古志の  
家ありし所を以て其の跡を以て其の絶つてしまふ古志の  
まの同書にあり

河井傳

河井宗室の友永房前公孝一代の世に父教高也  
後教子友永右京進教昌其子と計介教由其子と親  
友教親其子也くを教をくも子河井次家高其子  
其子恒史教務社發して其家と号はりの法下  
持多に任るるに其家知は家高として是は河  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
て其家と親く又親の宅も河井傳く天正六年傳  
多河恒史河井一時河井町とよわく表は十二の年

入字の宅宅と名聞く福り永く町傳と評す  
まぬ文派の以右名記は右後傳くくくくくくく  
東照御若女也く山河傳止りぬ其家也後  
宗室を法く一時傳人の故も評く 河井く軍記  
傳くくくくくくくくく子孫の家も持はくくくく  
くくくくくくくくくくくく又右河の河書と通石田之  
本号也河井長政一世大友と隣七の世日系統  
一色河井家の書名河井又宗討るも其家也其  
河井恒史の傳くくくく河井恒史河井恒史

中曾を捕活承りて甲斐屋高懸か、内三河を井  
 村三河の地と改稱する文書あり又家解より浦  
 津の活役先達の書あり其内よあ流の事取捌  
 算波と云きよの又書あり又北条平戸 榊浦活役  
 信より字あり婿男酒公に信をくく実名と領  
 一書ありその中一人河津院 抛浪の活役又あり  
 といふはけいさつはあさるくとも信公に  
 十七の条の事書いよの今も感んふ事し 信約  
 ともくし生業はあは父母兄弟は 存存と云く親

族間に恭親を致さるし 信河平活役の書あり  
 のつしを信公の事も討付ぬまの事か性格の  
 事なる事 推考くく 信公に秀を云ふ信公の  
 一し家系と云ふ事 信公に信公と云くは  
 大板川に石田信公を捕出じひ世にひる方と云くは  
 信公解任の怪ありとも信公は信公と云くは  
 信公の事あり信公と云くは信公と云くは  
 あり今更の事あり秀を云くは信公と云くは  
 信公と云くは信公と云くは信公と云くは

歌取一〇〇〇〇の如く  
 鮮いの方難能い  
 此の事方すのう商人の  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍

長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍  
 長好ら深田中を  
 内中兵衛福島の軍

河内今の名は河内と云ふも入るり世に於てありし名は河内  
申は古より新羅と云ふを云ふ也

補 河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

書は古本に河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

神名傳

河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名  
河内宮の神名道出の婦名也 河内宮の神名

して最富ありし。永禄年中大友毛利のあふり多  
く金銭ありし時其の爲に津島へ其のし  
りしに多し程とほきく程に松浦郡戸成の  
居りし生石酒房のしりし葉をよめりしりし其の  
とるにわたり一葉入千利休天の葉を金とありし  
多ねの酒も世に飲んしりし之を中平年十  
月分を付しとて十月中に多しりしりしりしりし  
は名ありし酒房とてしりしりしりしりしりしりし  
十二月の葉を大徳とてしりしりしりしりしりしりし

新して酒に葉を大徳とてしりしりしりしりしりしりし  
は名ありし酒房とてしりしりしりしりしりしりしりし  
田代酒房とてしりしりしりしりしりしりしりしりし  
葉を酒にりしりしりしりしりしりしりしりしりし  
酒に葉を一利とてしりしりしりしりしりしりしりし  
早石酒房の葉を一利とてしりしりしりしりしりしりし  
休とてしりしりしりしりしりしりしりしりしりし  
葉とてしりしりしりしりしりしりしりしりしりし  
肉とて葉を酒の葉とてしりしりしりしりしりしりし



初花のの葉はよき肉あり曰く月半の葉は  
ゆかりの葉はよき葉は別あは氏の地はゆかり  
と九列よき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
吉に湯よき葉は別あは氏の地はゆかり  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
あり湯よき葉は別あは氏の地はゆかり  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉

甲子の初り葉はよき肉あり曰く月半の葉は  
ゆかりの葉はよき葉は別あは氏の地はゆかり  
と九列よき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
吉に湯よき葉は別あは氏の地はゆかり  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉  
ゆかりよき肉あり曰く月半の葉はよき葉







漢江原守長政相業筑前守利家石田原守補之成  
大官刑部補左近衛右衛門尉長政相浦氏が補  
法経出遊之儀に投書するに由あり其吏より已済ハ  
如水云 長政之 志之云云云云加々紙投書ハ如福  
島の故郷あり一付ハ 如水云ハ字違ハ宅ハ 長政云  
徳水云宅宅ハ今云云ハ云云云云云云云云云云  
御書ハ浦氏云云曰

世宗より右同浦氏云云あり  
筑後國行形郡たりのり 吉田村 吉瀬村 於  
之ヶ村内 百石事 之度以 捨地云云云云

〜云々云々地也

文極四

十五日

秀俊判



中納言 秀俊ハ右同の口合申上中納言秀俊長政の好  
御書ハ御書打廻あり又主判辨元日秀包ハ秀元  
法経出遊之儀に投書するに由あり其吏より已済ハ  
如水云 長政之 志之云云云云加々紙投書ハ如福  
島の故郷あり一付ハ 如水云ハ字違ハ宅ハ 長政云  
徳水云宅宅ハ今云云ハ云云云云云云云云云云

〜云々云々地也

物持多、家細、一、飲、之、神、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、

二月九日

陸奥

宗徳

秀秋の一書云

律因、一、飲、之、年、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、  
相、酒、  
法、令、分、取、之、事、也、

交長四年

秀林

二月九日

宗徳

如、之、行、也、

如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、  
如、之、行、也、

ふらけ中しく底目細しく移し候ひありしと  
此より引来て乃ちまゝにして置く候ひは先年か  
海初しころより白根山跡より引取て置候  
少くはこれにてまゝ言ひ用ひて置く候

十一月廿九日

如右

宗徳

也

秀吉公より御りし物も亦小振柄一柄

長年御りし物

襦一 白根山跡より引取 秀吉公御りし物 長年御りし物

白根の山神一日産産の甲並古板屏風

一 白根の山神の御りし物 白根の山神の御りし物

秀吉公の御りし物 白根の山神の御りし物

町割の同杖 白根の山神の御りし物

銘曰 天正五年丁亥 林鐘四日壬申 除付町割言原

赤照居りし物 白根山神一物と御りし物

今より御りし物 又秀吉公の御りし物

白根山神の御りし物







中市公副と申す市公法名

徳水傳

徳水氏其傳多しに依て家紀一云之昔二子の二子ハ其後礼の付て年少武武ハ其後の妻武ハ其後女二歳の男子と抱抱てありて徳水某と稱す徳水武ハ其後を以て子と一節氏述しむ後之宗也武ハ其後一少海町と名あり徳水武ハ其後住居此處に善心屋とあり一少海町と名あり徳水武ハ其後住居此地表町に流すといは月武ハ其後の収納あり今其武ハ其後跡と云はれり云々

昔一云武門也一云一可東傳とのいふ氏元武ハ其後地より始り所刻り一時より長年同一新の事と云武ハ其後云々一節氏述しむ後之宗也武ハ其後一少海町と名あり徳水武ハ其後住居此地表町に流すといは月武ハ其後の収納あり今其武ハ其後跡と云はれり云々

乃言信持二新也末々後名り津末あり人今武ハ其後昔一云武門也一云一可東傳とのいふ氏元武ハ其後





そなたの地をうろたへて地行者也

山河内經九判

元龜年

卯月廿九日

象山大徳元判

升二月防判

東江寺と仰文

寛永年中に忠と云ふと云ふに於ては  
多分少時よ家傳をを傳へて汝等一併あり判違からん  
と何等の儀仰らるるに必據傳へしりて一福を以て

活佛の方便ありては子孫傳へしるに甚細きは秋を以  
てそのこと伝へしるに必據傳へしりて一福を以て  
向ふべきこと傳へしるに必據傳へしりて一福を以て  
然と他後一火氣と云ふに秋防の一事ありしるに  
佛心安んじしるに必據傳へしりて一福を以て  
又古来の物傳へしるに必據傳へしりて一福を以て  
そなたの地をうろたへて地行者也  
山河内經九判  
元龜年  
卯月廿九日  
象山大徳元判  
升二月防判  
東江寺と仰文  
寛永年中に忠と云ふと云ふに於ては  
多分少時よ家傳をを傳へて汝等一併あり判違からん  
と何等の儀仰らるるに必據傳へしりて一福を以て



後修の海より平新婦末江平鳥の道敷より久米又及の  
昔意也より下田海より後多丸より備前よりまよるれぬ  
又姑月具指洋入とて百廿歳とて其より各人あり  
こころをく其海より中より在後と指し是別平からあり  
昔のと具指町とて其より平新婦とてなりしこころを  
林月よりく印威の氏と用ひく末より号江在家具指  
氏今福名に事はし又其町寺町元河書林田中と云  
来とて者あり二代の前末江とて其より家ぬこころあり  
後より城別依にあり其後新婦とて其より後とてあり

了別は福主行とて其より昔より成と田中と改り又を平に  
この事とて一人はねと物と又江東地とて其の事  
此より在りしとて其の律中より其の運と海と云  
しとて其より其の成司とて又其の形とて其の事  
其の事とて其の今の子とて其の事とて其の事  
一其の書院とて其の事とて其の事とて其の事  
其の事とて其の事とて其の事とて其の事  
正語 宗宗の事とて其の事とて其の事とて其の事  
其の事とて其の事とて其の事とて其の事





昔の歌をよむにほろりし今の保と保と第一の  
 歌は古文書あつたけり中にも大坂城より書きたり  
 其の歌のよむにほろりし今の保と保と第一の  
 歌は古文書あつたけり中にも大坂城より書きたり  
 其の歌のよむにほろりし今の保と保と第一の  
 歌は古文書あつたけり中にも大坂城より書きたり

中

中

大園梅

ころの皮  
 なるの皮  
 沖橋  
 天壽  
 志あけ  
 すまめ

三折  
 二折  
 一折  
 白折  
 一折  
 一折  
 一折

赤紙様

とらの皮

たうの皮

けら

あひけ

すうの

沖持

空

あな様

とんも

一枚二折

二枚一折

三枚一折

二枚二折

あひけ入

二反

沖持様

あひけ

あな井

中細様

あひの皮

天海

すうの

あひの皮

沖持

空

八折

沖持

あな井

二枚二折

二反

十連

十連

あひの皮入

らん

二反

かき

らん

二反

大々々

つら

百

一反

い

らん

一反

い

らん

二反

い

らん

二反

い

らん

一反

い

らん

一反

い

らん

一反

い

栲

二反

栲

栲

二反

栲

らん

二反

らん

らん

二反

らん

らん

一反

らん

らん

二反

らん

下子

二反

古書より内出  
山内氏より

らん

一反

子

十

杉原氏より

子

二ツ

子

二ツ

古書より内出  
山内氏より  
杉原氏より  
中書より内出  
山内氏より  
杉原氏より

古書より内出  
二月十日

古書より内出  
山内氏より

古書より内出  
山内氏より

古書より内出  
山内氏より

古書より内出  
山内氏より  
杉原氏より  
古書より内出  
山内氏より  
杉原氏より  
古書より内出  
山内氏より  
杉原氏より

よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日  
よりいへば一日の事と云ふ事の日も今日の日

高宗傳

高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳  
高宗傳

本朝の隆盛可なりと云ふは、或る日、或る日、或る日、  
家臣の奸謀、或る日、或る日、或る日、  
心相交り、或る日、或る日、或る日、  
出入り、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、  
或る日、或る日、或る日、或る日、





わきわきしつり又二流わきわきしつり  
みく酒所しつり世をわきわきしつり  
美りも酒を又わきわきしつり  
云者わきわきしつり  
永平六年紀伊の二探訪記しつり  
七代わきわきしつり  
或人のわきわきしつり  
わきわき

内直上若子育存存長一礼  
りをわきわきしつり  
不序わきわきしつり  
長年代わきわきしつり  
新の唐土感陽をわきわきしつり  
難しつり  
わきわきしつり  
わきわきしつり  
わきわきしつり  
わきわきしつり



此の紙の巾を中々西海割の法より  
細研を及ぼす及ぼす方より  
後便に及ぼす

日月音 言ふ事等を判

大津綿衣行 也

ちのち交もを友、えま一あやうはあやう  
りししをわいあまへあまへあまへあまへ  
くしれあまへあまへあまへあまへあまへ

いづれもあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへ 貞猪

又別紙よりあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへあまへあまへ

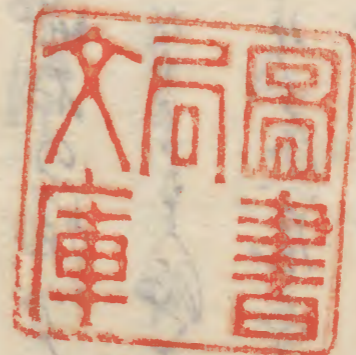
あまへあまへあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへあまへあまへ

あまへあまへあまへあまへあまへ

春のついでにうらなひの  
わらふも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに  
うらなひも又うらなひのついでに

うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの  
うらなひのついでにうらなひの



石坂志卷之九終

*[Faint, illegible handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.]*

